

属性あるいは能力賞賛に対する自己卑下的呈示に関する研究

原 田 純 治*・林 南 実**

Self-Derogative Presentation to Praise for One's Attribute or Ability

Junji HARADA Minami HAYASHI

問題・目的

私たちは、日常生活のさまざまな場面で、「自己の否定的な側面に言及したり、優れた側面について積極的な言及を控えたりすること」がある。このような振る舞いは自己卑下的呈示と呼ばれる(吉田・浦・黒川, 2004)。

自己卑下的呈示についてはこれまで多くの研究がなされてきたが、「なぜ自己卑下的呈示をするのか」に関して、主に2つの立場からの解釈が提供されている。もともと自己を低く評価しやすい日本人の自己観の表れだとする立場と、良い印象を与えることを目的として本心と異なる自己呈示をするという立場である(村上・石黒, 2005)。前者は、それぞれの文化の考え方の違いによるものであり、集団主義の文化の中に生きている日本人は、周囲とは違う自分をアピールする欧米人のように自己高揚的ではない。そのため自己の有能さをアピールしようという動機づけが低く、自己評価の低さにつながっていると推測されている。

一方、後者はいわゆる「本音と建前」の考えであり、相手に良く思われたい、円滑な人間関係を築きたいという思いから、意図的に控えめな自己呈示をすると考えられる立場である。日本では古くから謙遜の美德があり、控えめに振る舞うことが他者との関係を良好に維持するという考えが一般的に広まっている。小学校高学年頃から自己卑下的な振る舞いに好印象を持ち始めるという報告(例えば、吉田・古城・加来, 1982)もあり、私たちは子どもの頃からそうした振る舞いを無意識のうちに学び、身につけてきたのである。

日常の自己卑下的呈示は、多くの場合相手からの何らかの側面について褒められて返答する場面において観察される。特に女性の集団内においては、褒める行為が成された場合、「そんなことないよ」と、褒められたことを否定することが多くある。このような女性の行動は「女は本音を隠すから怖い」などと揶揄されることも多いが、常に受け手が一定の態度を取るとは限らず、何を褒められたかによってどのような言葉を返すかは変わると考えられる。例えば、「優しい」や「かっこいい」など、自分の性質や特徴などを褒められた場合と、「頭が良い」「運動神経が良い」などの自分の能力を褒められた場合では、記録などにより比較的客観視しやすい能力を褒められる方が、自己卑下的呈示が起りづらいと考えられる。これまでの研究では、他者の反応や親密性との関連を検討するものが多く、

*長崎大学教育学部 **長崎大学教育学部平成27年度卒業生

賞賛される側面の違いと自己卑下的呈示との関連を検討した研究は見当たらないため、本研究において検討を加える。

加えて、自己卑下的呈示をする人には、性格上の共通点があると考えられる。例えば、場や状況に応じて自分の振る舞い方を変えるのが得意な人は、褒められた場合でも、客観的に自分の置かれた状況を察知し、どのような反応が社会的に適切であるかを捉えて自己卑下的呈示を行うのではないかと推測される。また、印象操作を目的とした自己卑下的呈示の動機は、人から好意的な印象を得たい、人から嫌われたくないという欲求が深く関わっていると考えられる。

そこで本研究では、以下の仮説を設定し検証を行うことを目的とする。セルフ・モニタリング傾向が強い者ほど自己卑下的呈示を行うだろう。賞賛獲得欲求・拒否回避欲求が強い者ほど自己卑下的呈示を行うだろう。また、これらの関連性に性差があるのかについても探索的に検討する。さらに、賞賛を与える他者が同性か異性かによって自己卑下的呈示が異なるかについても検討する。

方 法

調査協力者

大学生95名を対象とした質問紙調査を行い、そのうちデータに不備のあった2名を除く93名（男性18名、女性75名）を分析の対象とした。

調査時期

2014年12月に調査を実施した。

質問紙の構成

(1) 回答者の性別。

(2) 場面想定法により、他者から褒められた場合の反応について質問した。ここでは「女性の友人」「男性の友人」双方から「優しい（属性）」「頭が良い（能力）」とそれぞれを褒められた場合について、「認めるような反応をする（4点）」「どちらかといえば認めるような反応をする（3点）」「どちらかといえば否定するような反応をする（2点）」「否定するような反応をする（1点）」の4件法で回答を求めた。例えば、「相手からの属性に関する賞賛場面」での友人の発言は、「あなたのことを、Aさんが『優しいね』って褒めていたよ。実は、私も前からそう思っていたのよね」とした。賞賛する友人の何らかの意図を推測させないために、賞賛の内容をのみ伝える目的でこのような間接的表現を借りた表現法を用いた。

(3) 自らの優しさ、頭の良さの認知に関して「かなり優しい（頭が良い）と思う（5点）」「まあまあ優しい（頭が良い）と思う（4点）」「普通だと思う（3点）」「あまり優しくない（頭が良くない）と思う（2点）」「まったく優しくない（頭が良くない）と思う（1点）」の5件法で回答を求めた。

(4) 岩淵・田中・中里（1982）の「セルフ・モニタリング尺度（全25項目）」を用い、「まったくそう思わない（1点）」～「非常にそう思う（5点）」の5件法で回答を求めた。

(5) 小島・太田・菅原（2003）の「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（全18項目）」を用い、「あてはまらない（1点）」～「あてはまる（5点）」の5件法での回答を求めた。

結果と考察

1. 自己評価と賞賛に対する反応

回答者の属性および能力の自己評価（高・低）、性別、賞賛を与える者（以下賞賛者）の性別を要因とする分散分析を行ったところ、二次の交互作用が有意であった。そのため、賞賛者が同性の場合と異性の場合とに分けて回答者の性別と属性あるいは能力に関する自己評価の高低（回答が4点、5点の者を高群、3点から1点の者を低群とした）を要因とする2要因の分散分析を行った。

(1)同性からの属性賞賛

分散分析の結果、回答者の性別の主効果が有意であり ($F_{(1,89)}=9.60, p<.01$)、女性は男性より同性からの賞賛に対し自らの属性に関し否定的に反応すること（すなわち自己卑下的に呈示すること）が見出された（図1）。

(2)異性からの属性賞賛

分散分析の結果、属性に関する自己評価の程度の主効果が有意であり、回答者の性別と属性に関する自己評価の程度との交互作用は有意な傾向にあった ($F_{(1,89)}=6.75, p<.05$; $F_{(1,89)}=3.96, p<.10$)（図2）。

属性に関する自己評価の程度の主効果から、属性に関し異性から賞賛された場合、属性に関する自己評価の高い者に比べ、属性に関する自己評価の低い者は否定的な反応（自己卑下的呈示）を示すことがわかった。

交互作用に関する下位検定の結果、属性に関し異性から賞賛された場合、女性では属性に関する自己評価の高低によってその反応は異なるのに対し、男性では属性に関する自己評価の高い者に比べ、属性に関する自己評価の低い者は否定的な反応をする傾向が見出された。

男性は自己評価に沿った反応をしたが、女性は自己評価が低い群についても高い群と同程度の反応を示した。女性は男性よりも、異性による属性賞賛を素直に受け入れる傾向にあるのではないかと推察される。

(3)同性からの能力賞賛

分散分析の結果、回答者の性別の主効果が有意であった ($F_{(1,89)}=15.40, p<.01$)。

この結果は、能力に関して同性から評価された場合、女性は自らの能力に関する自己評価の高低にかかわらず、否定的な反応をすることを示すものであった（図3）。

(4)異性からの能力賞賛

分散分析の結果、回答者の性別の主効果と能力に関する自己評価の主効果が、ともに有意な傾向にあった ($F_{(1,89)}=3.85, p<.10$; $F_{(1,89)}=3.93, p<.10$)（図4）。

回答者の性別の主効果は、能力に関し異性から評価された場合、男性に比べ女性はより否定的な反応をすることを示すものであった。

能力に関する自己評価の主効果は、能力に関して異性から評価された場合、能力に関する自己評価の高い者に比べ、自己評価の低い者はより否定的な反応をすることを示すものであった。

以上の結果から、他者から賞賛を受けた場合、異性からの属性評価の場合を除けば、一般的に女性は男性より否定的な反応をすること、すなわち自己卑下的呈示を行う傾向がある

こと、また自己評価が高い者に関しては共通して同様の男女差が見られ、いずれの場面においても男性は賞賛を受け入れがちなのに対し、女性は自己卑下の反応をすることが明らかになった。

また、全般的に男性は賞賛を受け入れる傾向が見られたが、相手の性別によってわずかではあるが反応が異なっていた。男性は、同性である男性から褒められると自信がなくても賞賛を認める傾向があり、また異性である女性から褒められると、自信があれば賞賛を受け入れ、自信がなければ否定するという自己評価に沿った反応を示した。これは、同性である男性からの賞賛は額面通りに受け取り素直に受け入れるが、異性である女性からの賞賛に対する反応に関しては、女性の自己卑下傾向が関係していると考えられる。自己卑下の呈示は、相手が自己卑下の呈示を支持する場合に起こりやすいと考えられている(村上・石黒, 2005)。そのため、女性の自己卑下傾向を男性が認識していれば、高揚的な自己呈示はあまり好まれないものとして捉えていることが考えられる。

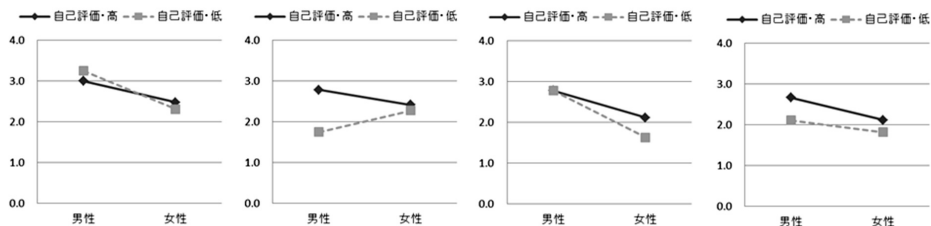


図1 同性からの属性賞賛 図2 異性からの属性賞賛 図3 同性からの能力賞賛 図4 異性からの能力賞賛
に対する反応 に対する反応 に対する反応 に対する反応

2. セルフ・モニタリング傾向との関連性

(1) 同性からの属性賞賛

回答者の性別とセルフ・モニタリング傾向の高低(平均値3.2を基準に設定した)を要因とする分散分析を行った結果、回答者の性別の主効果とセルフ・モニタリング傾向の主効果が有意であり、両要因の交互作用が有意な傾向にあった($F_{(1, 89)}=10.61, p<.01; F_{(1, 89)}=4.22, p<.05; F_{(1, 89)}=3.53, p<.10$) (図5)。

回答者の性別の主効果については、前述の自己評価の高低の場合と同一であるため以下その解釈については省略する。

セルフ・モニタリング傾向の主効果は、属性に関して同性から賞賛された場合、セルフ・モニタリング得点の低い者に比べ、セルフ・モニタリング得点の高い者は否定的な反応を示すものであった。

回答者の性別とセルフ・モニタリングの程度間の交互作用の有意な傾向は、女性ではセルフ・モニタリング得点の高低者間に差はみられないのに対し、男性ではセルフ・モニタリング得点の低い者に比べ、セルフ・モニタリング得点の高い者は否定的な反応を示すものであった。

以上のことから、セルフ・モニタリング傾向が強ければ自己卑下傾向が見られるだろうという仮説は、男性が同性から属性を賞賛される場合において部分的に支持された。

(2)異性からの属性賞賛

分散分析の結果、いずれの要因の主効果も交互作用も有意ではなかった ($F_{(1,89)}=1.10$, ns ; $F_{(1,89)}=1.19$, ns ; $F_{(1,89)}=0.00$, ns)。

(3)同性からの能力賞賛

分散分析の結果、回答者の性別の主効果が有意であった ($F_{(1,89)}=18.02$, $p<.01$) (図6)。

(4)異性からの能力賞賛

分散分析の結果、回答者の性別の主効果が有意であり、セルフ・モニタリング傾向の主効果が有意な傾向にあった ($F_{(1,89)}=4.96$, $p<.05$; $F_{(1,89)}=2.93$, $p<.10$) (図7)。

セルフ・モニタリング傾向の主効果の傾向は、能力に関して異性から賞賛された場合、セルフ・モニタリング得点の低い者に比べ、セルフ・モニタリング得点の高い者は否定的な反応を示すことを示すものであった。このことから、セルフ・モニタリング傾向が強ければ自己卑下をする傾向が強いだろうという仮説は、異性から能力を賞賛される場合、男女ともにおいて支持された。

以上より、セルフ・モニタリング傾向が強ければ自己卑下をする傾向が強いだろうという仮説に関し、同性からの属性賞賛、また異性からの能力賞賛の場面で仮説は支持された。この傾向は男性において強く、男性が自己卑下の呈示を行う要因の一つとして、セルフ・モニタリング傾向が強くと関連していることが示唆される。

一方、女性はセルフ・モニタリング傾向の高低の影響は男性ほど顕著ではなく、自己卑下の呈示の生起とセルフ・モニタリング傾向との関連性は、女性においてより弱いことがうかがえる。あるいは、女性の場合、セルフ・モニタリング傾向が高いからこそ自己卑下の呈示をしない、とも考えられる。女性は自己卑下傾向が高く謙遜は日常的に行われるが、いつ・いかなる状況においても否定的な反応をしていると、逆に反発を買うこともある。セルフ・モニタリング傾向が高いからこそ、社会的状況を察知した適切な行動として「自己卑下の呈示をしない」反応を選択しているという可能性も考えられる。

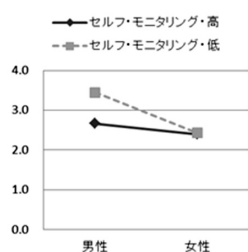


図5 同性からの属性賞賛に対する反応

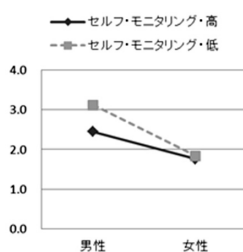


図6 同性からの能力賞賛に対する反応

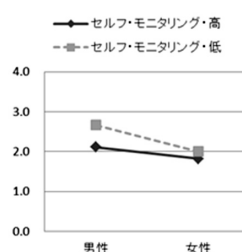


図7 異性からの能力賞賛に対する反応

3. 拒否回避欲求との関連性

(1)同性からの属性賞賛

回答者の性別と拒否回避欲求の程度(平均値3.5を基準に高・低群に分割した)を要因とする分散分析を行った結果、回答者の性別の主効果が有意であった ($F_{(1,89)}=9.35$, $p<.01$) (図8)。

(2)異性からの属性賞賛

分散分析の結果、拒否回避欲求の主効果が有意であった ($F_{(1,89)}=6.00, p<.05$) (図9)。

この結果は、属性に関して異性から賞賛された場合、回答者の性別にかかわらず、拒否回避得点が低い者に比べ、拒否回避得点が高い者は否定的な反応を示している。

(3)同性からの能力賞賛

分散分析の結果、回答者の性別の主効果が有意であり、拒否回避欲求の主効果が有意な傾向にあった ($F_{(1,89)}=19.64, p<.01$; $F_{(1,89)}=3.47, p<.10$) (図10)。

拒否回避欲求の程度の主効果の有意な傾向は、能力に関して同性から賞賛された場合、拒否回避得点の低い者に比べ、拒否回避得点の高い者は否定的な反応を示す傾向が見られた。

また、回答者の性別と拒否回避欲求の間の交互作用に有意な傾向が見出された ($F_{(1,89)}=3.30, p<.10$)。この結果は、女性では拒否回避の高低者間に差は見出されないのに対し、男性では拒否回避得点の低い者に比べて、拒否回避得点の高い者は否定的な反応を示している。よって、拒否回避欲求が強い者ほど自己卑下呈示を行うだろうという仮説は、同性から能力を賞賛される場合、特に男性において支持された。

(4)異性からの能力賞賛

分散分析の結果、回答者の性別の主効果が有意であった ($F_{(1,89)}=5.84, p<.05$)。また、回答者の性別と拒否回避欲求の間に有意な交互作用の傾向が見出された ($F_{(1,89)}=3.82, p<.10$) (図11)。

回答者の性別と拒否回避欲求の程度の間交互作用は、女性では拒否回避得点の高低者間に差は見出されないのに対し、男性では拒否回避得点の低い者に比べて拒否回避の高い者は否定的な反応を示す傾向が見られた。よって、拒否回避欲求が強い者ほど自己卑下の呈示を行うだろうという仮説は、異性から能力を賞賛される場合、男性において支持された。

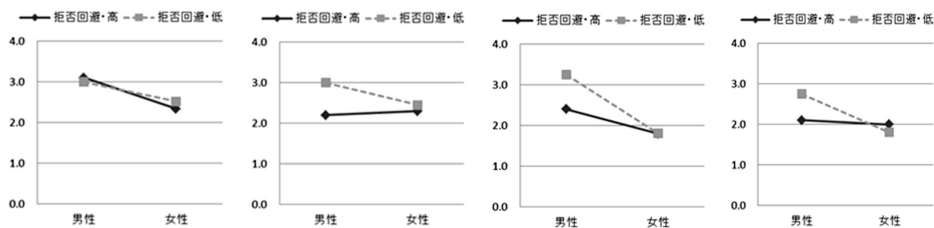


図8 同性からの属性賞賛に対する反応 図9 異性からの属性賞賛に対する反応 図10 同性からの能力賞賛に対する反応 図11 異性からの能力賞賛に対する反応

4. 賞賛獲得欲求との関連性

(1)同性からの属性賞賛

回答者の性別と賞賛獲得欲求の程度(平均値2.8を基準に高・低群に分割した)を要因とする分散分析を行った結果、回答者の性別の主効果が有意であった ($F_{(1,89)}=10.10, p<.01$) (図12)。

(2)異性からの属性賞賛

分散分析の結果、いずれの要因の主効果も交互作用も有意ではなかった($F_{(1,89)}=0.75, ns$; $F_{(1,89)}=0.03, ns$; $F_{(1,89)}=0.04, ns$)。

(3)同性からの能力賞賛

分散分析の結果、回答者の性別の主効果が有意であった($F_{(1,89)}=16.40, p<.01$) (図13)。

(4)異性からの能力賞賛

分散分析の結果、回答者の性別の主効果が有意であった($F_{(1,89)}=4.74, p<.05$) (図14)。

以上の結果より、まず拒否回避欲求と自己卑下的呈示との関連はおおむね仮説通りの結果が得られ、特に男性において顕著であった。

図8と図9、また図10と図11の結果を比較すると、拒否回避欲求の高い男性は、同性である男性からの賞賛よりも、異性である女性からの賞賛に対して自己卑下的に呈示する傾向が窺われる。これは本研究で示唆された、女性の自己卑下的呈示傾向が関係していると考えられる。村上ら(2005)によれば、そもそも自己卑下的呈示を支持している相手に対しては、それを「適切な振る舞い」と認知して自己卑下的呈示する傾向があるとされている。拒否回避欲求の高い男性は、女性に対して自己卑下的呈示をすることが適切な振る舞いだと捉え、そこから逸脱した振る舞いは嫌われるという予測を立てて反応していると推察される。反対に自己卑下的呈示がそれ程高くない男性同士のやり取りであれば、「自己卑下的な反応をしない」ことが相手に拒否されることとは関連づけられないと考えられる。

一方で、女性は拒否回避欲求の高低による反応の違いはあまり見られず、自己卑下的呈示の生起と拒否回避欲求との関連は、女性にとっては弱かった。あるいは拒否回避欲求が高いからこそ自己卑下的呈示をしない、とも考えられる。いつ・いかなる時も否定的な反応をしていると、逆に相手からの反発を買うこともあるため、嫌われないための行動として「自己卑下的呈示をしない」反応を選択している可能性も十分あるだろう。

また、今回は他者を男女の友人に限定した。たとえば好意を寄せる相手や、新学期に初めて出会う同級生など、相手との関係性の設定によっては、女性においても拒否回避欲求

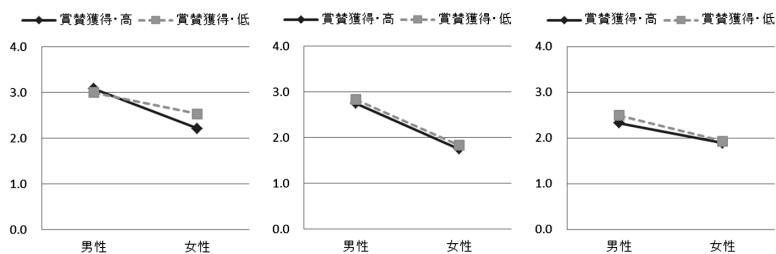


図12 同性からの属性賞賛に対する反応

図13 同性からの能力賞賛に対する反応

図14 異性からの能力賞賛に対する反応

と自己呈示との関連性が見られる可能性もあるかも知れない。

賞賛獲得欲求に関しては、いずれの場合においても主効果、交互作用に有意差が見出されなかった。したがって、賞賛獲得欲求が強い者ほど、より自己卑下的呈示を行うだろうという仮説を支持する結果は得られず、賞賛獲得欲求と自己卑下的呈示には、男女ともほ

は関連性がないことが示唆された。自らを控え目に評価することでよい印象を与えることはあっても、賞賛獲得を得るために自己卑下の呈示が積極的に行われる可能性は低いと言える。

また、本研究での場面想定は、他者からの賞賛を受けてどのように反応するかを問う形式であった。そのため、この時点ですでに褒められたいという欲求が一時的に満たされたため反応に差が見られなかった可能性が考えられる。自らが起点となって自己呈示する場面では賞賛獲得欲求との関連性があるのかも知れない。今後検討する必要があるだろう。

総合考察

本研究では、賞賛を受ける側面の違い、すなわち属性と能力の違いによって自己卑下呈示の生起に違いがあるかについて検討を進めた。

全体的な傾向として、同性よりも異性から賞賛される場合の方が比較的自己卑下が生じやすく、加えて属性に対する賞賛よりも能力に対して賞賛を受ける方が比較的自己卑下呈示が生じやすいという傾向が見出された。客観性の高い能力を褒められた場合は、自己卑下呈示は生じにくいのではないかと予測したが結果は逆であった。しかし、自らにとって有益な特性において自己卑下呈示は見られ周囲の他者にとって有益な特性ではあまり自己卑下しない傾向があることが指摘されている (Harihara, Yamaguchi, & Niiya, 2000; Lin & Yamaguchi, 2003)。能力を自らにとって有益な特性、属性を周囲の他者にとって有益な特性と捉えるならば、本研究結果は Harihara ら (2000) の指摘に一致すると言えるだろう。

男性の自己呈示に関しては、次のような結果が見出された。まず同性からの属性賞賛の場合、セルフ・モニタリング傾向との関連が見られた。次いで異性からの属性賞賛、同性からの能力賞賛の場合は拒否回避欲求との関連、そして異性からの能力賞賛の場合はセルフ・モニタリング傾向と拒否回避欲求の両者と関連があった。異性からの能力賞賛の場面では、男性の「その場に合わせた振る舞い」対応が可能なことと「嫌われたくない」という動機の両者が自己卑下呈示を規定していると言えるだろう。

女性の自己卑下呈示に関しては、全体として自己評価、セルフ・モニタリング傾向、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の程度の違いによって自己卑下呈示の程度は異ならなかった。しかし子細に見ると、自己評価が低い場合、また拒否回避欲求が低い場合、共通して異性からの属性賞賛に対し自己卑下的に反応しないことが窺われる (図2および図9)。自己卑下の呈示への周囲からの拒否を厭わない、自己評価が低い場合には自らの「優しい」という属性に対する異性からの賞賛は、能力に対する賞賛に比べ、受け入れられやすいと考えられる。それだけ、女性にとっては能力よりも属性への賞賛の方の価値が高いのかも知れない。

今回の研究では、自分に賞賛を与える他者を同性の友人・異性の友人と設定した。今後は他者との関係を、たとえば地位の上下関係がある他者、好悪のいずれかの関係にある他者などの多様な関係を設定し、自己卑下の呈示は他者との関係が異なっても普遍的なのか特異的なのかについて検討を加える必要があるだろう。また、全体的な結果では、男性に比べ女性の自己卑下呈示が顕著であった。男性が課題を媒介とする友人関係を築く傾向が

あるのに対して、女性は情緒的なつながりとしての友人関係を重視するため、周囲との関係づくりの中で特に印象操作を目的として自己卑下呈示を行う必要があると考えられる。日常的に自己卑下呈示を行う女性にとって、本研究で扱ったセルフ・モニタリング傾向、賞賛獲得・拒否回避欲求以外の要因が複雑に関係しているかも知れない。さらに検討していく必要がある。また、属性と能力の具体的設定として「優しい」と「頭が良い」という賞賛を用いた。これらが、果たして属性と能力の妥当な指標なのかについても今後検討を加える必要があるだろう。

引用文献

- Harihara, M., Yamaguchi, S., & Niiya, Y. (2000). Japanese self-effacement: Low self-regards or self-presentation? *Poster presented at the 15th Congress of International Association for Cross-Cultural Psychology, Pultusk, Poland.*
- 岩淵千明・田中国夫・中里浩明 (1982). セルフ・モニタリング尺度に関する研究 心理学研究, 53, 54-57.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11, 86-98.
- Lin, C. & Yamaguchi, S. (2003). The role of self presentational motive in Japanese self-effacement. *Paper presented at the 50th annual meeting of Japanese Group Dynamics Association, Kyoto.*
- 村上史朗・石黒 格 (2005). 謙遜の生起に対するコミュニケーション・ターゲットの効果 社会心理学研究, 21, 1-11.
- 吉田綾乃・浦 光博・黒川正流 (2004). 日本人の自己卑下呈示に関する研究：他者反応に注目して 社会心理学研究, 20, 144-151.
- 吉田寿夫・古城和敬・加來秀俊 (1982). 児童の自己呈示の発達に関する研究 教育心理学研究, 30, 30-37.